

## 鹿児島大学教育学部

# 教育実践総合センターニュース

第8号（平成22年3月）

### 目次

○ 巻頭言（教育実践総合センター長 松田君彦）	1
○ 異動	2
○ 教育実践セミナーの開催報告	2
○ 教育実践フォーラムの開催報告	3
○ 実践的な教職科目の開設についての報告	3
○ 独立行政法人「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」 採択事業の実践報告	10
○ 学部共通講義「教育臨床Ⅰ」および「教育臨床Ⅱ」の開設報告	15
○ 教育相談の活動報告	16
○ 教育実践研究紀要第19巻の発刊報告	16
○ 研究員・研究協力員による研究の紹介	17
○ 公開講座「授業に活かすコンピュータとインターネット」の開催報告	21
○ 公開講座「教育臨床 実践セミナー」の開催報告	22
○ 公開講座「ネットいじめの理解と情報モラル教育の進め方 ～非対面式コミュニケーションの心理と情報モラル～」の開催報告	22
○ センター運営委員会の報告	23
○ 国立大学教育実践研究関連センター協議会の報告	23
○ 九州地区教育実践研究会の報告	24
○ 総合資料室の利用状況	25
○ 寄贈図書目録	25

## ■巻頭言

### 教育実践総合センター長（教授） 松田君彦

本センターを中心的な実施主体として平成19年度にスタートした特別教育研究事業（『県教育委員会との連携による教員養成カリキュラムの開発・実施』）は、三ヵ年のプロジェクト事業なので今年が最終年度です。この間に取り組みられてきた実践はプロジェクト終了後も引き継がれることとなりますので、この一年間はこれまでの成果をさらに発展させる活動を展開しながらも、三ヵ年の実践をまとめると同時に今後に向けての課題を洗い出すという作業に取り組んできました。

教職研究部門では、これまで取り組んできた各実践的教職科目をさらに実践的なものにするためのカリキュラム編成に努めてきましたが、今後の課題として、教員養成段階で学級経営に関する資質能力形成に資するカリキュラムをどのように構築するかということや、平成25年度から本格実施される「教職実践演習」に向けて、現在の研究的試行をいかに実効的なものに仕上げていくかということなどが挙げられています。

教員研修研究部門では、本学が平成19年度に引き続き、平成21年度独立行政法人教員研修センターの「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」事業の採択を受けたことから、『実践的な力量形成・自己開発を実現する教員研修モデルカリキュラム』の開発～教員のキャリアステージに応じた授業実践力評価の可視化を目指して～というプログラムの実践に取り組んできました。そして現在は両部門の「成果報告書」とこの成果を収めたDVDを県下すべての小中学校に配布すべく準備に取り組んでいるところです。

教育実践部門と学校臨床部門は恒例の公開講座をそれぞれ開催するとともに、11月には合同で公開講座「ネットいじめの理解と情報モラル教育の進め方」を企画して好評を得ました。また2月には障害児教育専修からの提案を受けた形で、本センターの主催により「教育実践フォーラム：ユニバーサルデザインを利用した授業の工夫」を、アメリカ・ランドマークカレッジ研究所所長スティーブ・ファドン教授を講師に迎えて開催しました。また、1月22日には九州地区教育実践研究会を当番校として開催しました。

今後も本センター内外との協働をより密にして、地域と時代の要請に応える活動に取り組んでいきたいと思えます。

## ■異動

教育臨床研究部門の有倉巳幸准教授が、平成21年10月1日付で教授に昇任しました。

教育臨床研究部門の客員教授について、次のような異動がありました。迫武仁客員教授（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課課長）が、平成21年3月31日付で退任しました。岡留秀一客員教授（鹿児島県総合教育センター教育相談課課長）が、平成21年7月1日付で着任し平成21年9月30日付で退任しました。堂免良久客員教授（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課課長）が、平成21年10月1日付で着任しました。

## ■教育実践セミナーの開催報告

本センターでは教員養成をはじめ教育現場の要請等に応えるべく、特色ある教育支援事業を展開して参りましたが、今年度もこれらの取組をより一層推進するために、2回の「教育実践セミナー」を企画・開催しました。

各回とも2時間の設定で、内容を2部構成としました。前半は主に本センターの4部門の代表が、調査研究の報告や研究などについて発表しました。後半は各教科専修等の担当教員が、「新学習指導要領のポイント」と題してシリーズで講話を展開しました。

### < 第1回 教育実践セミナー >

- 日程等；平成21年7月16日（木）16:10～18:10  
於；教育学部講義棟204号室
- 参加者；県教育庁及び教育行政関係者（義務教育課、県総合教育センター、日置市教育委員会）、（代用）各附属校（園）、教育学部の大学職員（38名）
- 内容等；報告 ～ 【教員研修研究部門】「大学教員の講師派遣について」大久保直志准教授

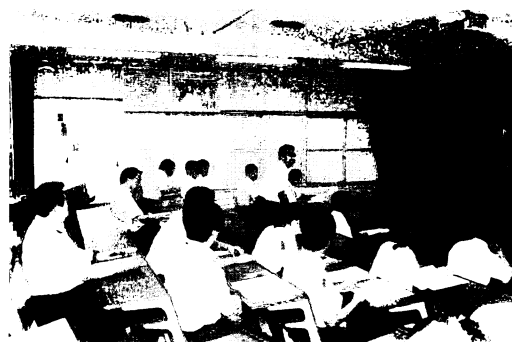
鳴門教育大学における先行実践の調査研究をベースに、本学の地域貢献の方向性や学校現場における研修へのアプローチの可能性などについて検証した内容等を報告しました。

発表 ～ 【教育臨床研究部門】「学校災害時の心理的ケア体制について」関山徹准教授

想定される学校災害の具体例を取り上げながら心理的ケア体制構築の取組方について解説するとともに、子ども向けや保護者向けなど、危機管理に配慮した中・長期的なプログラム整備の重要性が説かれました。

講話 ～ 【英語科専修】「新学習指導要領の要点（外国語・英語）—中学校・高等学校・小学校英語活動を中心として—」樋口晶彦教授

具体的な変更点、特に「言語活動」や「言語材料」の取扱い、「Communicative Writing」の指導の在り方、「Process Approach」の導入の取組方、談話レベルの指導の在り方など、具体的な事例を示しながら分かりやすく解説されました。



第1回教育実践セミナー

### < 第2回 教育実践セミナー >

- 日程等；平成21年12月2日（水）16:10～18:10、於；教育学部附属教育実践総合センター2F演習室

- 参加者；(代用) 各附属学校 (園)、教育学部の大学職員 (25名)
- 内容等；講話①【音楽科専修】「新学習指導要領・音楽科について」 日吉武准教授

音楽科における新学習指導要領改訂のポイントや特徴的な内容を具体的に取り上げ、解説していただきました。また、小学校と中学校の系統性や指導の一貫性の重要性を説かれるとともに、共通事項を紐解き、今後、丁寧に音や音楽に接することの重要性や想像力、コミュニケーション、感性などの重要性を熱く語られました。

- 内容等；講話②【図画工作・美術科専修】「新学習指導要領のポイントー小学校の図画工作及び中学校における美術科の学習指導を中心にー」 小江和樹教授  
小学校と中学校を分けて具体的な改訂のポイント解説をしていただきました。また、「生きる力」や「コンピテンシー」、「学力」と今回の改訂の関連についても、具体的な授業場面を取り上げながら指導の在り方を説いていただきました。



第2回教育実践セミナー

質疑応答・意見交換では、いずれも時間一杯、具体的な観点から現場の声として熱心にやりとりがなされました。「このような貴重な内容なので、学校に戻って同僚にも詳しく話したい」、「新学習指導要領の解説については、ぜひ今後ももっと具体的に踏み込んだお話を伺いたい」、「繰り返し何度も開催してほしい」など、次回の継続を期待する御意見が寄せられました。来年度に向け、内容の充実・改善に向けて取り組んで参ります。

## ■教育実践フォーラムの開催報告

本センターには、教育学部教員からの発案に基づいて教育実践フォーラムを企画する制度があります。今回はその初めてのケースとして、片岡美華准教授 (障害児教育) の提案によりユニバーサルデザインをテーマとした教育実践フォーラムを開催しました。すべての人にとってわかりやすい授業・教育とは何かという問題意識のもと、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた幼稚園から大学までの教育実践で活用できる指導の工夫について、米国から専門家を招いて議論を深めました。当日は、総勢55名 (特別支援学校などの教員15名・大学教員20名・学生20名) の参加があり、盛会となりました。詳細は、次のとおりです。

○日 時：平成22年2月2日 (火) 午後5時～6時30分

○場 所：教育学部大会議室

○主 題：ユニバーサルデザインを利用した授業の工夫

○講演者：スティーブ・ファドン先生

(米国ランドマークカレッジ研究・運営部門副部長  
兼ランドマークカレッジ研究所所長)

○対 象：学校関係者、大学教職員、学部生・大学院生



## ■実践的な教職科目の開設についての報告

私たちは、教員として身につけておきたい理論知、あるいは実践知についてそれぞれの育成を図ってきたこれまでの科目に加えて、平成19年度からそれらの往還を図る目的で「実践的教職科目」と呼ぶ科目を各学年段階に新たに加え、それらの科目の構想及び実践に取り組んできました。

このことは、理論知と実践知をより確かなものとして育成するとともに、それらに支えられた確かな実践的指導力を身につけた教員の育成を目指したものです。

この「実践的教職科目群」の中で、新たに開設された科目が、1年次の「教職基礎研究」、2年次の「教職実践研究（I及びIIの2科目）」、さらに、従来からある3年次「教育実地研究」の改善を踏まえたうえでの4年次の「教職応用研究」などの科目です。これらの科目に関する本年度の取組や次年度から始まる教職応用研究の構想についてご紹介します。

## ◆「教職基礎研究（1年生後期：教職理解科目）」の実践

### 1 授業目標

教職基礎研究は、学校体験やプロジェクト学習をとおして、教職の意義や教師の役割について学ぶことで、教師の職務について基礎的な理解を図るために、それまでの「教職研究」に代わり平成19年度からスタートしました。

本授業の特色は、1年生を中心に、小中学校での3日間の体験をとおして、それまで生徒の視点から見ていた学校を、教師の視点からとらえ直すところにあります。そして、大学において学ぶべき理論と身につけるべき実践力の位置づけを明確にし、将来教職に就くまでの過程を、学生自身が明確に設計できることを目指しました。

### 2 授業の概要

3年目を迎える本授業は、鹿兒島市内の小中学校への学校体験をカリキュラムに取り入れているため、授業実施にあたっては、事前の綿密なやりとりが必要です。鹿兒島市教育委員会の協力を仰ぎ、学校体験の受け入れ可能な学校を毎年募り、受け入れを希望した学校に本学部の教員が現場に出向き、事前説明と学校の要望を話し合います。各学校での話し合いの結果も含め、数回の教員打合せを行い、教員間の共通理解を図ります。また、学生に対しては、9月に実施する学校体験までに、3回のオリエンテーションと事前指導を行います。

学生たちは、3日間の学校体験を通して、教師が、教科指導を含め、どのような仕事をしているのか、また、学校での活動でどのような動きをしているのかを見たり経験したりしています。教育実習との違いがしばしば指摘されますが、教育実習は教科指導や朝の会などの教科外指導といった実務体験を積んでいくことを主眼に置き、教師という役割そのものを体験しています。その点で言えば、あくまでも教師の目線で学校を見ることを主眼においており、厳密な意味で教師の役割を体験しているのではありません。

この学校体験では、学部の教員が引率を行う点も教育実習と異なります。教育実習では、通常、実習先の学校に指導を行う教師がおり、その教師の指導に従って実習が進んでいきます。しかし、学校体験では、引率教員が必要に応じて学生の指導を行います。この引率には、毎年50名程度の学部教員が当たりました。

平成21年度は、75校（小学校53校、中学校22校）に291名の学生が割り振られ、50人の本学部教員の引率の下、学校体験が実施されました。次年度以降の課題を明らかにしていくために、毎年、体験終了後の学生と、受け入れ先の学校、および本学部の引率教員を対象に、学校体験後にアンケートを実施しますが、分析結果を見る限り、この3年間の試みは、概ね目標を達成したものと評価できると言えましょう。

後期のプロジェクト学習では、5～7名でグループを組み、教師の仕事や学校について研究課題を設定し、学校体験を通して得た知見や資料を集めた上で、KJ法を用いて研究課題を整理していきます。その後、図式化された資料をもとに、研究成果を発表資料にまとめます。

平成20年度以降、体験学校単位で学生グループは構成されましたが、毎年50近くのグループが作られます。これらのグループは、いくつかの小教室に分かれて作業を行います。その際、各教室には、進行や指導、学生のグループ活動の支援を行うタスクフォースと呼ばれる教員がつかいます。教職基礎研究の授業担当者は3名ですが、実際のところ、20名近くの教員が会議等のスケジュールを調整して参加しています。本授業においてこれらの教員の協力は欠かせないと言えましょう。そして、毎回の授業後には、各教室に入った教員で振り返りを行い、共通理解を図っています。

後期の授業においても、授業アンケートを実施しますが、過去2年の分析結果を見る限り、学生たちにとっては教師の仕事をもとめる中で、具体的な教職イメージをもっており、また、4年間の学修デザインを構成していく意味においても、有益な授業になっているようです。

### 3 今後の課題

始まって3年が終わろうとしています。多くの成果が得られている一方で、以下に挙げるような課題も少なからずあります。毎年の調査・検証によって解決可能な課題は克服されていますが、一部の課題については、今後更なる改善を図っていくことで解決へと向かうと言えます。

まず、教師の指導や介入についてです。基本的には、学校体験もプロジェクト学習も学生が自ら目標を設定し主体的に

関与していくことが期待されます。従って、教員が細かく指導計画を立てて、修得させる授業とは性質異なります。しかし、指導や介入をほとんどせず見守るだけでは、学修目標に到達することも難しいと思われます。いつどのようなタイミングで指導や介入を行うかは、教員間の共通理解のもと、適切な働きかけが求められるでしょう。

次に、学校体験についてです。いくつかの体験事項については、学部と受け入れ校との話し合いで作成される学校体験モデルプランの中で実施されています。しかし、基本的には、各学校のスケジュールの中に組み入れてもらっていることもあり、学生がそれぞれの学校で体験する内容は様々です。その多くを授業観察に当てている学校もあれば、運動会・体育祭シーズンということもあって、練習の観察と補助に当てている学校もあります。また、広範囲に学校が点在しているため、割り当てによっては、3日間とはいえ、通勤にかなりの費用がかかる学生も出ています。実践的科目群の基礎でもあり、学生たちの体験をいかに揃えていくかが今後の課題と言えましょう。

最後に、評価についてです。昨年度、学修目標の到達を適切に評価するためにルーブリックを作成しました。しかし、授業での活動やワークシートに記入された内容といった徴候がどのレベルの評価基準に当たるのかについては、まだ明確になったとは言えません。その意味で、作成したルーブリックが妥当性、信頼性を持ち得るかの検証が今後必要となってくると思います。

## ◆ 「教職実践研究Ⅰ（2年生前期：総合講義）」の実践

### 1 目的等

本科目は学習指導を構想し(本時レベル)、その構想に基づいて模擬授業を行わせることを通して、自己課題の解決に進んで取り組み、学習指導に関する基礎的・基本的な知識・技能を身につけることを目的としています。3年の教育実地研究Ⅰを見通し、学習指導に関する導入段階を扱うため実際に授業を参観したり、授業DVDを視聴したりする活動等を取り入れ、授業について学生がより具体的に理解できるように工夫しました。

### 2 本年度の改善点

2年目を迎える本年度は、次のような面から改善を加えました。

#### (1) 学修目標の見直し

本科目がねらいとする「学習指導に関する実践的力量」という面や実践的な科目として重視したい「自己改善」という面、そして、2年前期開設という時期的な面等を考慮して、本学部で育てるべき19の資質能力項目との関連を図り、目標を次のように設定し直しました。

ア 「学習指導」に関する力量形成を目指して自分の課題を明らかにし、意欲的に授業参観をし指導案を作成するなどしながら進んで課題解決に取り組むことができる。

イ 児童生徒の学力向上を図る授業を目指して授業前、授業中、授業後の各段階における基礎的・基本的な事項(教育課程や指導法の理解等)を身につけるとともに1時間の授業を構想し、指導案を作成することができる。

ウ 学習指導の基礎的・基本的事項についての理解に基づきながら模擬授業や授業研究を行うことができる。

#### (2) 授業内容の構成について

○ 第1ステージ(講義・演習部分)が講義のおよそ半分を占め、後半の実践的な学びが窮屈でした。そこで、前半の部分を短くし、その分を後半の指導案作成や模擬授業の実施に振り分けました。

○ 専門的な知識に関する内容を後半部分の指導案作成の前に位置づけていたので、これを早い段階(前半部)に位置づけました。

○ 講義・演習-授業参観-指導案作成-授業実施-省察という構成を考えると、意義は感じながらも2回の授業参観は多少無理があります。そこで、本年度は、1回の授業参観にし、不足する分は、講義・演習の中で授業DVDの視聴等を取り入れるよう改めました。

### 3 授業計画の概要

2で述べた目標や内容の改善を踏まえ、作成した授業計画は以下の通りです。

回	内容・方法	形態等
	S T E P 1 (学習指導に関する基礎・基本を身につける)	
1	○「本科目の目標内容と解決していく自己課題(自己評価)について」	オリエンテーション
2	○「学習指導案と授業」-目的と作成手順-	講義・演習
3	○「授業の進め方、指導法の工夫等」	講義・演習

4	○「きめ細やかな指導、発問や板書の在り方等」	講義・演習
5	○「学習評価、授業観察と授業設計」	講義・演習
6	○「教材研究の進め方」 講義・演習	講義・演習
S T E P 2 (授業観察及び指導案作成)		
7	○「参観授業の分析」(演習)	演習
8	○「授業観察と授業研究会の参観」	現地調査
9	○「公開研究授業を通して学んだこと」【ワークシートに記入後グループ討議】	演習・討議
10	○「指導目標にそった学習指導案の作成①」	演習
11	○「指導目標にそった学習指導案の作成②」	演習
S T E P 3 (模擬授業及び授業研究)		
12	○「授業の具体的な準備」	演習
13	○ 模擬授業の実施及び授業研究等	模擬授業/授業研究
14	○ 授業研究及び授業研究、授業に対する指導 (評価)	模擬授業/授業研究
15	○「本科目における成果及び今後の課題について」	講義・演習

4 授業の実際

(1) 受講者及び担当教員

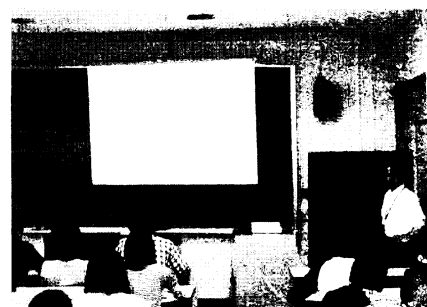
受講者：教育学部2年生44名 3年生1名 計45名

担当教員：教育実践センター専任教員4名 協力教員8名

(2) 授業の概要

**STEP 1 (第1回～第6回)** ～学習指導についての基本的な理解～

2年前期の学生にとっては、学習指導に関する知識はほぼ白紙の状況です。そこでまず、実際の学習指導案をもとにして、学習指導案作成の目的や手順等を理解させました。(第1回と第2回)その後、授業DVDや実際の板書等を活用しながら「授業の進め方や指導法の工夫」、「発問や板書の在り方」、「学習評価の進め方」等、学習指導についての基本的な理解を図りました。(第3回～第5回)併せて、自分の実施する授業教科に関する教材研究の進め方等について各教科教育学担当教員から講義を受けました。



授業DVDを視聴して (第6回)

**STEP 2 (第7回～第11回)** ～授業参観と学習指導案作成～

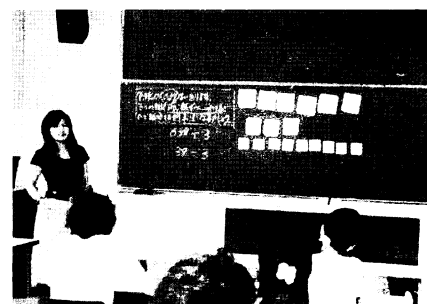
STEP 1で身につけた学習指導に関する基本的な理解に基づいて、公開研究授業の参観を行いました。(第7回は参観授業の指導案分析、第8回は研究授業参観)学生はこの授業と同じ単元の授業を行うことになっているため、より強い目的意識を持って参観することができます。また、授業参観等を通して学んだことをまとめ、それに基づいて小グループで協議を行わせたため、授業参観の成果を共有することもできました。(第9回)その上に立って、第10回と第11回、各教科教育学担当の教員の指導を受けながら学習指導案を作成しました。



グループ討議の様子

**STEP 3 (第12回～第15回)** ～模擬授業実施とその省察～

学習指導案作成の終了した学生から授業の準備に入ります。どのような教具が必要か、板書をどのようにしようかと次第に学生の意識も授業実践へと進んでいきます。(第12回)そして、各教科毎に(学生の多いところは二グループに分け、少ないところは一つにまとめて実施)他の学生を児童生徒役に見立てて模擬授業を実施しました。授業が終わったら、相互批評をしながら授業研究も取り入れていきます。他者の行う授業を見る目を養うことも授業力を育てていく上では大変重要なことです。



算数科の模擬授業

## 5 今後の課題

本年度の実践に基づきながら、次年度は目標を一層焦点化し、より学生の実態に即した指導になるように内容配列の改善を図っていきたいです。また、評価に関する在り方も一層明確にしていきたいと考えています。

## ◆「教職実践研究Ⅱ（2年生後期：総合講義）」の実践

### 1 目的等

本科目では、学級経営の基本的な考え方や学級担任の役割等を理解させることを目的としています。他大学では学級経営の講義・演習を4年次で扱うケースも見られますが、昨年度の試行に関するアンケート調査から、2年次でも学校体験や演習等と組み合わせることで基本的な理解を持たせることができ、そのことが教育実習でも効果的に作用すると考えています。そのため、今回は、基本的な内容に焦点化したり、実際の事例と関連付けて理解させたりしてより分かりやすくすることを心がけました。

具体的には、学級経営に関する講義・演習で基本的な知識を持たせた後、学校現場において学級担任の授業や子どもたちのかかわりを実地に観察させ、報告会で学びを共有させます。その中で、知識と実際の事例を関係づけて理解できるよう支援します。そして、そこで得られた学びを「学級経営案」の作成演習に活用させることで、学級経営の基本的な考え方や学級担任の役割等について理解を深めさせようと考えています。

また、本県は地理的な特性から離島・へき地に多くの学校があるため、教師をめざす学生に早い段階からへき地教育への関心を高めることにも配慮しています。そのため、学校体験のフィールドとして少人数の学級や複式学級のある学校に受入れをお願いしたり、離島間の学校を結ぶ「ICTを活用した遠隔共同学習」の取組等に関する講義・演習を取り上げたりしています。

### 2 取組の経過

#### (1) 受講者及び担当教員

受講者：教育学部2年生12名、3年生2名（計14名）

教員：本センター専任教員4人

#### (2) 実施状況

##### ア) STEP1「学級経営についての基本的な知識・理解」

まず、学生に対して、学級経営に関する資質能力について自己診断をさせた後、基本的な知識・理解を持たせるための講義・演習を行いました。各講義では、関連する教育活動の写真や授業VTR、ロールプレイなどを取り入れ、具体的な理解が深まるような工夫がなされました。

回	主 な 内 容
第1回	「学級経営について（1）」 学級経営についての理解の前に／1 学級経営とは／2 学級経営案の作成／3 学級経営を支えるもの／4 学級経営の鍵①・②
第2回	「学習指導と学級経営」 1 学習指導と学級経営のかかわり／2 学習指導における学級経営上の配慮事項／3 学級経営案における「学習指導」の内容
第3回	「生徒指導と学級経営」 1 生徒指導とは何か／2 生徒指導の観点から学級経営を考える（自己指導能力の育成の視点からみた学級経営、SSTの体験）／3 事例研究 等
第4回	「学級経営を支える心の教育、健康・安全教育」 1 学級経営の観点から／2 心の教育の観点から／3 健康・安全指導の観点から／4 危機管理体制の確立

##### イ) STEP2「学校体験及び体験報告会」

前段の内容を受けて、今度は学生たちが学校教育の現場で実際に観察するため、学校体験を実施しました。学生は、事前に自己目標と観察の観点を設定して体験に臨みました。今回は、新型インフルエンザによる影響等もあり、日置市内の予定9校のうち7小学校で実施することになりました。単日の9：30～16：00という短い時間設定となりましたが、校長先生や担任の先生方の講話をはじめ、授業参観、子どもたちとのふれあい、学級設営の観察などを通して学んだことを熱心に記録する姿が見られました。また、複式学級の授業を初めて参観した学生は、ガイド学習

で自主的に学習を進める子どもたちを見て感心していました。

後半の講義では、それぞれの学校体験を振り返りながら考察を深めさせ、その成果を共有するため体験報告会を設定しました。なお、インフルエンザで参加できなかった学生には、別途、JC.Cerdのモジュール型コア教材の学級経営に関する教材を視聴させ、それを基にした課題研究の成果を報告させました。お互いの多様な報告や研究にふれる中で、自分の気付かなかった点を改めて見直すなど、理解を深め合うことができましたようです。



学級経営について質問する学生たち

ウ) STEP 3 「学級経営案の作成」

ここでは、これまでの学びを活用し、演習の中で学級経営案を作成します。担当教員の側から、仮想の学校経営案、学年経営案、学級の実態等の資料を配布し、学生はどの学級の担任になるかを決めて、学級経営案の作成に入ります。今年は、同学年の学級を選んだ学生同士が学年経営や発達段階、子どもの実態等について意見交換できるように「学年会」の場を設定する予定です。最終的には、経営案の発表会を行い、相互の成果等について共有させることにしています。

3 今後の課題

学級担任の職務は、教員養成段階で経験できるものではなく、その役割等は学校現場で実際の当事者にならないと分からない部分も相当あります。しかし、一方では初任者教員にも、年度初めから学級の子どもたちとの円滑な人間関係を築いたり、学級集団づくりを営んだりする学級経営力が、これまで以上に期待されるようになってきていることも事実です。そのため、教員養成の段階で、学級経営に関する資質能力形成に資するカリキュラムをどのように構築することができるのか、具体的には本教育学部「教師としての資質能力」表の「D-1 学級経営に関する構想力」につながるための、本科目の位置付けや他科目との関連のたせ方などを検討したいと考えています。

◆ 「教職応用研究（4年生前・後期：総合講義）」の構想

教職応用研究は来年度4年生から実施する科目で、平成25年度から本格実施される「教職実践演習」と同趣旨の科目です。「教職実践演習」の本格実施に向け、試行・研究的に実施していく予定です。

1 目標

自己の課題に応じ、協力校等（小、中、地域）における継続的な学校（地域）支援活動（学級担任補助や学習指導補助等）・観察やその省察活動等を通す中で、教職理解、学習者理解、教科領域等の内容理解を深めたり、自己改善力や指導の構想力、展開力、評価力等の向上を図ったりします。

2 学修目標及び評価

学修目標については、学部で育成すべき19の資質能力項目の観点から学生に自己課題を設定させ、その課題解決を通じた達成状況に基づいて学修目標を設定していく予定です。評価に関しても、その目標に照らし学部担当教員が蓄積された資料やワークの記述、学校（地域）支援活動や話し合い等の観察により量的質的に判断し評価します。

3 授業計画（半期分を示す。）

回	主 な 内 容
1	オリエンテーション及び教職実践に関する課題の設定 ・本科目の目標や活動内容等について知る。 ・これまでの教職に関する学びや教育実地研究等の取組を振り返ったり、19の資質能力等に関する自己評価を行ったりして自己課題の明確化を図る。
2	本コースでの取組の視点の明確化及び計画立案 ・自己課題の解決法、学校地域支援活動の計画、到達目標等を設定する。 ・支援活動や課題に着目して小グループを編成する。 ・上記内容に関して大学教員（や協力校等担当）と話し合い、活動内容等を決定する。
3 ~ 6	学校地域支援活動①②③④と課題の追究 I ・附属学校での支援活動 ・日置市TA事業での活動 ・いちき串木野青松塾での活動 ・特別支援教育ボランティア活動 (各種支援活動とその省察活動及び記録、資料の収集等)

STEP 1



7	学校地域支援活動前半の振り返り活動等	STEP 2
8	・大学教員（協力校担当教員）と学校地域支援活動に関するフィードバックを行う。 ・後半の取組に対するフィードフォワードを行う。 (改善点の発見、目標の明確化、活動の見直し等)	
9	学校地域支援活動⑤⑥⑦⑧⑨と課題の追究Ⅱ	STEP 3
13	・附属学校での支援活動 ・日置市TA事業での活動 ・いちき串木野青松塾での活動 ・特別支援教育ボランティア活動 (支援活動に関するワークシートへのまとめ、ポートフォリオ、映像等の集積等) 内容例：登校指導 朝の会、係活動、授業実践・補助、校務分掌補助、PTA参加 ……等	
14	学校地域支援活動全体の振り返り及びまとめの活動	STEP 3
15	・自分で当初設定した到達目標に照らし、課題に関して明らかになったことや今後の課題等についてまとめる。 学校地域支援活動の成果等を発表し、その共有を図る。 ・本科目の学修で得られた成果や今後の課題等についてまとめたことを全体（もしくはグループ）で発表する。 ・今後（後期もしくは学校現場）での課題を集約し今後の活動の見通しを持つ。	

## ◆自主講座「教員養成基礎講座Ⅰ・Ⅱ」

### 1 概要

「教員養成基礎講座」は、全学部の教員志望学生対象の自主講座として、当センター教員が中心となって運営しており、今年度が4年目の取組になりました。学校現場の様子を知り、教師としての資質能力についての理解を深めるとともに、教職の魅力について考えを深める中で目指す教師像を確かなものとし、大学で何をどのように学ぶか、教師となる「学び」の指針や見通しを持つことを目的としています。全学組織の教員養成カリキュラム委員会と連携しながら、鹿児島県教育委員会の協力を得て、多彩な講師陣によるオムニバス形式で、現場の実践を多様な視点から取り上げているところが特色です。平成18年度から2年生対象の講座を始めましたが、平成19年度から3年生対象講座も開設しています。

### 2 開講時期と受講生募集

#### (1) 開講時期

5月～11月の水曜日、17:50から18:50までの60分の講座として、15回実施しています。初年度の平成18年度は、土曜日の90分の講座として15回実施しましたが、平成19年度から、受講しやすい時間帯に開設するという趣旨から、60分と時間は短縮されましたが、授業日の5限授業終了後に設定しています。

#### (2) 受講生募集

毎年4月、講師との日程調整等を行ったのち、教員養成カリキュラム委員会を通じて、各学部へ依頼してポスター掲示等で広報を図っています。また、教職科目等、対象の学生が多く受講している授業の際などに、案内・募集要項を配布し、学生への周知を図っています。

### 3 講義内容と講師

学生の要望等も踏まえながら、講師やテーマの設定を少しずつ工夫しているところですが、今年度は新しく、3年生対象講座に現職教員と座談会形式で語り合う回を設けました。

表1 平成21年度の講座内容と講師

回	講座Ⅰ（2年生対象講座）		講座Ⅱ（3年生対象講座）	
1	教師をめざす皆さんへ（教師の魅力）	教職支援室	教師の資質向上のために	教育学部
2	教師になるために（教師の資質能力）	教育学部	学級経営	教育学部
3	子ども理解とカウンセリングマインド	教育学部	学校における教育課程の基礎知識	教育学部
4	特別支援教育の基礎	教育学部	特別活動の基礎知識	教育学部
5	教育史に学ぶ	教育学部	現職教員とのフリートーク 小学校2、中学校、高校、特別支援学校、養護教諭の6分科会	現職教員6名
6	学習指導要領の基礎	教育学部	総合的な学習の時間、キャリア教育の基礎知識	教育学部

7	教育方法の基礎	教育学部	これからの特別支援教育	教育学部
8	教育評価の基礎	教育学部	教育相談とコミュニケーション能力	教育学部
9	国と鹿児島県の教育施策の動向と特徴 (学力向上)	県教育委員会	教育関係法規の重要性	教育学部
10	国と鹿児島県の教育施策の動向と特徴 (生徒指導)	県教育委員会	離島・へき地教育、複式教育の基礎知識	県教育委員会
11	生きる力をはぐくむ授業づくり 小学校、社会、理科、英語の4分科会	県教育委員会 4名	学習指導と評価	教育学部
12		教育学部4名	道徳教育と道徳の時間の指導	県教育委員会
13	教育関係法規の基礎	退職校長	学校保健・安全の基礎知	県教育委員会
14	人権同和教育の基礎	県教育委員会	学校と家庭、地域社会の連携	県教育委員会
15	総括講義	教育学部	総括講義	教育学部

#### 4 受講者

受講者は各回の感想を書いています。それぞれのテーマについて新たな発見をしたり、自分自身の考えや思いを見つめたりする様子がうかがえます。また、講座を通しての感想として、「教師の在り方を深く考えるようになった。」「教師について今まで見えなかった部分を知ることができた。」「教師になりたいという気持ちが強くなるとともに、自分に足りないものを意識するようになった。」などの声が聞かれ、この講座が教職を志望する学生にとって有意義な機会となっていると考えています。

しかし一方で、受講者数の推移を下表に示しましたが、教育学部生以外の受講者がまだ少ないこと、また、4年目に入って受講者数の減少の傾向が見られるなど、講座の存在やそのよさをさらに浸透させていくことは今後の課題です。自主講座としての意義と問題点、正規のカリキュラムへの位置づけの可能性や課題などの検討も含めて、今後さらに充実を図れるように取り組んでいきたいと考えています。

表2 受講者数の推移

年 度		講座Ⅰ (2年生対象講座)				講座Ⅱ (3年生対象講座)		
		H18	H19	H20	H21	H19	H20	H21
受講者数		84	88	69	29	121	83	76
学部別内訳	法文学部	12	21	12	2	14	3	5
	理学部	6	4	7	1	23	3	9
	工学部	0	0	0	2	0	2	0
	農学部	4	1	1	0	0	0	0
	水産学部	1	2	0	0	5	4	1
	教育学部	61	60	49	24	79	71	61

## ■独立行政法人「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業の実践報告

本学は平成19年度に引き続き、鹿児島県教育委員会と協働して、平成21年度独立行政法人教員研修センターの「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」事業の採択を受け、学校現場における教員研修の在り方に注目しました。特に、平成19年度に開発した模擬授業を活用した課題焦点化型の研究授業やワークショップ型の授業研究のスタイルを基盤に、インターバル研修の研究に取り組みました。

まず「授業実践力診断カルテ」を作成し、授業担当者のキャリアに応じた課題等を模索しました。次に、とらえた課題等を基に授業デザインに取り組み、模擬授業で検証しました。さらに、授業デザインの見直し・改善に取り組み、実際の児童生徒を対象に研究授業を展開しました。そして、研究授業の様子を撮影し、ビデオ検証型の授業研究に取り組みました。

ここでは、これまでの実践の概要を紹介します。

### 1 連携の充実

大学と教育委員会の連携による研修カリキュラム開発事業 (大学委嘱事業)

【連携先】

鹿児島県教育庁義務教育課	鹿児島市立伊敷中学校
鹿児島県教育庁鹿児島教育事務所日置支所	鹿児島市立坂元中学校
鹿児島県総合教育センター	鹿児島市立郡山中学校
鹿児島市教育委員会学校教育課	日置市立湯田小学校
日置市教育委員会学校教育課	いちき串木野市立荒川小学校
いちき串木野市教育委員会学校教育課	鹿児島大学教育学部附属小学校
鹿児島市立田上小学校	鹿児島大学教育学部附属中学校

2 プログラム名

「実践的な力量形成・自己開発を実現する教員研修モデルカリキュラム」の開発  
 -教員のキャリアステージに応じた授業実践力評価の可視化を目指して-

3 プログラムの特徴

まず、授業を支える「授業実践力」を明らかにし、「授業実践力診断カルテ」を開発します。そして、カルテに基づき自己診断に取り組み、結果をレーダーチャートで可視化させることで改善点や課題をとらえることができます。また、プロジェクトチームが開発したモデル授業を基に、教員研修カリキュラムを工夫します。参加者は、ビデオ検証型でモデル授業を分析する授業研究に取り組むことで課題を明確にとらえ、焦点化することができます。さらに、キャリアステージに応じたグループ編成でモデル授業を検証することで、キャリアごとに追及すべき授業実践力を把握するとともに、キャリア相互のかかわりの重要性も再認識しながら、実践的な力量形成の実現が期待できます。

4 研修の目的

本プログラムの開発・改善を目的とした大学教員並びに現職教員等による3ステージで構成された研修会をインターバル形式で実施(6月、8月、11月)しました。

第1回目の研修会(ホップセミナー)では授業実践力診断カルテを提示・研修し、授業提供者を中心に診断に取り組みました。そして、学習指導上の課題等も把握しました。

第2回目の研修会(ステップセミナー)では授業実践力診断カルテの意義をとらえるとともに、プロジェクトチームが開発した学習指導案を基に模擬授業を提供し、課題焦点化型で授業研究を展開しました。なお、この研修会は県下すべての小・中学校等の教員に案内し、拡大して実施しました。

第3回目の研修会(ジャンプセミナー)では授業担当者がインターバル研修として2学期中に取り組んだ研究授業の映像を基に、ビデオ検証型で授業研究に取り組み、研修の成果や課題などを検証しました。

5 本事業のイメージ



## 6 これまでの取組

## (1) モデカリ事業 (モデルカリキュラム開発事業の略称) 推進委員会【計4回実施】

- ① 平成21年 5月12日 (火) 15:00 ~ 17:00 鹿兒島大学教育学部大会議室
- ② 平成21年 6月20日 (土) 9:00 ~ 12:00 同上学部講義棟305号室他
- ③ 平成21年 8月20日 (木) 9:30 ~ 16:50 同上学部講義棟204号室他
- ④ 平成21年10月15日 (木) 13:40 ~ 16:30 鹿兒島市立郡山中学校  
平成21年10月26日 (月) 13:40 ~ 17:00 いちき串木野市立荒川小学校  
平成21年10月29日 (木) 14:00 ~ 16:00 日置市立湯田小学校  
平成21年11月17日 (火) 10:50 ~ 12:30 鹿兒島市立坂元中学校

※ ④の4件は授業担当者の現任校で実施した研究授業で、関係委員が出席し、委員会と兼ねて実施した。

## (2) プロジェクト検討会

- ① 国語科プロ【計7回実施】 上記推進委員会と同時開催、その他、臨時の検討会を3回実施
- ② 算数科プロ【計6回実施】 上記推進委員会と同時開催、その他、臨時の検討会を2回実施
- ③ 社会科プロ【計5回実施】 上記推進委員会と同時開催、その他、臨時の検討会を1回実施
- ④ 理科プロ【計5回実施】 上記推進委員会と同時開催、その他、臨時の検討会を1回実施

※ どのプロも、電話やファックス、メールなどにより、頻繁に情報交換や会議等を実施

※ 授業担当者が連携協力校に訪問研修したり、担当者が授業担当者の現任校を訪ね、指導や打合せを複数回実施したりしている。

## (3) ホップセミナー

○ 日時 平成21年 6月20日 (土)

## ① 開会行事

→ 学部長挨拶、義務教育課長挨拶、趣旨説明 9:00 ~ 9:15

## ② ホップセミナー

I 授業実践力と診断カルテの活用 (講義) 9:15 ~ 9:45

→ 講義担当者; 鹿兒島大学教育学部 隈元 浩二郎 教授

II 「授業実践力診断カルテ」活用の自己診断 (演習)

9:45 ~ 10:00

III プロジェクトによる情報交換等

10:00 ~ 10:40

IV グループ発表及び意見交換 (協議)

10:40 ~ 11:20

V 診断カルテの活用 (講義)

11:20 ~ 11:45

→ 講義担当者; 鹿兒島大学教育学部 有倉 巳幸 教授

## ③ 閉会行事

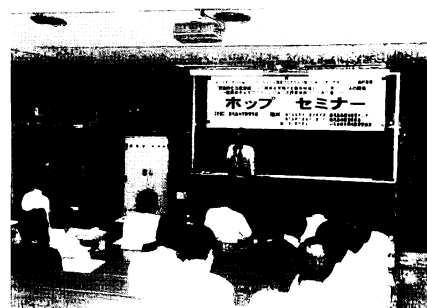
→ 副学部長挨拶、諸連絡、その他 11:45 ~ 12:00

## ④ 各プロジェクト検討会

13:00 ~ 16:00

○ 場所 鹿兒島大学教育学部第1講義棟2F204号室他

○ 参加者 各モデカリ事業推進委員、各プロジェクト検討会 (拡大支援員を含む)



開会行事

## (4) ステップセミナー

○ 日時 平成21年 8月20日 (木)

## ① 開会行事

→ 学部長挨拶、義務教育課指導監督挨拶、趣旨説明

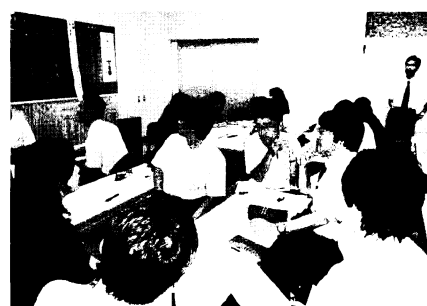
9:30 ~ 9:40

## ② ホップセミナー

I 授業実践力診断カルテの活用 (講義)

9:40 ~ 10:15

→ 講義担当者; 鹿兒島大学教育学部 関山 徹 准教授



国語科の模擬授業

## Ⅱ 各教科分科会①

→ 診断カルテ等、模擬授業 10:25 ~ 12:30

## Ⅲ 各教科分科会②

→ 授業研究、その他 13:30 ~ 15:00

Ⅳ 教育講演会「授業実践力の向上とその評価」 15:10 ~ 16:45

→ 講師；鳴門教育大学大学専門職大学院 長 島 真 人 准教授

## ③ 閉会行事

→ 鹿兒島大学教育学部附属教育実践総合センター長挨拶 16:45 ~ 16:55

○ 場 所 鹿兒島大学教育学部第1講義棟204号室他

○ 参加者 県下すべての公立小・中学校の教諭等を対象に一般公開、モデカリ事業関係者

## (5) 研究授業の実施

## &lt;中学校・理科プロジェクト&gt;

① 実施日 平成21年10月15日(木)

14:10 ~ 16:30

② 場 所 鹿兒島市立郡山中学校

〒891-1105 鹿兒島市郡山町1500

③ 授業者 鹿兒島市立郡山中学校 久徳 晋也 教諭

④ 題材等 「力と圧力」(1年)

⑤ 参加者 モデカリ事業の関係者8名、学校職員及び一般参加者等25名、計33名

⑥ 指導者 鹿兒島市教育委員会学校教育課 柏 木 昇 指導主事  
鹿兒島大学教育学部 土 田 理 教授

※ 鹿兒島市教育委員会指定の研究公開と同時開催



理科の研究授業

## &lt;小学校・国語科プロジェクト&gt;

① 実施日 平成21年10月26日(月) 13:40 ~ 17:00

② 場 所 いちき串木野市立荒川小学校

〒896-0065 いちき串木野市荒川2347-1

③ 授業者 いちき串木野市立荒川小学校 田中 剛志 教諭

④ 題材等 「平和のとりでを築く」(6年)

⑤ 参加者 モデカリ事業の関係者9名、学校職員等6名、計15名

⑥ 指導者 鹿兒島県教育庁義務教育課 小 野 修 指導主事  
いちき串木野市教育委員会学校教育課

福 井 久 善 課長補佐

鹿兒島大学教育学部 上 谷 順三郎 教授

※ 荒川小学校の校内研修会と同時開催



国語科の研究授業

## &lt;小学校・算数科プロジェクト&gt;

① 実施日 平成21年10月29日(木) 14:00 ~ 16:00

② 場 所 日置市立湯田小学校

〒899-2201 日置市東市来町湯田4064

③ 授業者 日置市立湯田小学校 下伊倉 大輔 教諭

④ 題材等 「分数のかけ算とわり算(2)」(6年)

⑤ 参加者 モデカリ事業の関係者8名、学校職員等9名、計17名

⑥ 指導者 鹿兒島県教育庁義務教育課 末 満 一二三 指導主事  
鹿兒島大学教育学部 植 村 哲 郎 教授

※ 日置市教育委員会教育長も参観

## &lt;中学校・社会科プロジェクト&gt;

① 実施日 平成21年11月17日(火) 10:50 ~ 12:40

## ② 場 所 鹿兒島市立坂元中学校

〒892-0811 鹿兒島市玉里団地3丁目45-2

## ③ 授業者 鹿兒島市立坂元中学校 池田 修 教諭

## ④ 題材等 「第1次世界大戦とアジア・日本」(2年)

## ⑤ 参加者 モデカリ事業の関係者11名、学校職員等7名、計18名

⑥ 指導者 鹿兒島県教育庁義務教育課 堀 口 俊 雄 指導主事  
鹿兒島大学教育学部 田 口 紘 子 講師※ 鹿兒島市教育委員会指定の事業に基づく校内プロジェクト  
研究授業と同時開催

社会科の研究授業

## (6) ジャンプセミナー

## ○ 日 時 平成21年11月28日(土)

## ① 開会行事

→ 学部長挨拶、義務教育課長挨拶、趣旨説明

12:30 ~ 12:40

## ② ホップセミナー

I インターバル研修の意義(講義) 12:40 ~ 13:00

→ 講義担当者; 鹿兒島大学教育学部 武 隈 晃 教授

## II 各教科分科会①

→ 診断カルテ等、ビデオ検証型研究授業 13:10 ~ 15:00

## III 各教科分科会②

→ ビデオ研修型授業研究、その他 15:15 ~ 16:55

## ③ 閉会行事

→ 各分科会毎の閉会行事 16:55 ~ 17:00

## ○ 場 所 鹿兒島大学教育学部共通教育棟203号室他

## ○ 参加者 各モデカリ事業推進委員、各プロジェクト検討会(拡大支援員を含む)



国語科分科会

## 7 カリキュラムの開発における工夫・留意点

## (1) 開発した「授業実践力診断カルテ」を基に、教科レベルでの診断カルテを開発

→ 社会科プロを中心に、具体的内容の診断カルテを開発

## (2) インターバル研修の効果等の検証

→ 段階的なプログラムの構築とインターバル研修の内容充実

## (3) 大学並びに教育行政、教育機関、公立学校、附属学校など、15機関・組織連携の推進

→ 連携の日常化と他の教育活動連携への派生

## (4) 調査研究や現場研修の成果を活かしたモデルカリキュラムの改善

→ 授業担当者の附属学校への1日研修や研究公開等への積極的参加

## (5) 開発した「授業実践力診断カルテ」の具体的な活用

→ いちき串木野市教育委員会主催の管理職研修会でのカルテ活用

## 8 その他の取組等

## (1) これまでの実践の振り返りとその検証、並びに「成果報告書」の作成

## (2) 成果報告会の開催

## ★ 平成21年度の成果報告会を開催

・ 開催日時 平成22年2月27日(土) 9:30 ~ 16:45

※ 本事業の成果報告に関連するのは午前中の内容

・ 会 場 鹿兒島大学「稲盛会館」

・ 会 名 鹿兒島大学教育学部 教育実践フォーラム2010

— 実践的力量形成をめざした教員養成と教員研修の充実 —

・ 内 容 報告1「実践的な力量形成を図る教員研修モデルカリキュラム」  
シンポジウム「実践的な力量形成を実現する教員研修の在り方」

※ 報告2及び講演は省略

- (3) モデカリ事業の成果をまとめたDVDの作成：準備中  
 (4) 成果報告書及びDVDの配布（県下すべての小・中学校等）：準備中

## ■学部共通講義「教育臨床Ⅰ」および「教育臨床Ⅱ」の開設報告

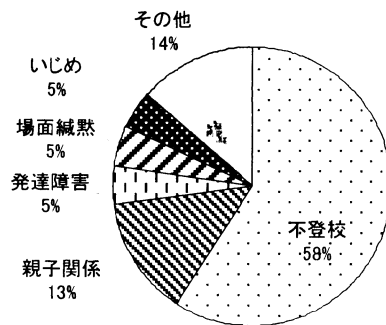
本センター教育臨床研究部門では、教育相談や特別支援の場において、より深い児童生徒理解や実践的な指導力を身につけさせるために、3年生以上を対象として学部共通講義「教育臨床Ⅰ」および「教育臨床Ⅱ」を開設しました。位置づけとしては、「学校教育カウンセリング（2年次必修）」の発展的内容ということになります。この講義の特色としては、①近隣の中学校で日常的にスクールカウンセラーを務めている教員2名が担当、②第一線の現場で活躍する現職教員（客員教授）がゲストティーチャーとして参加、③少人数制をとってロールプレイなどの実践的な演習や関連する専門機関の見学を行う、といった点が挙げられます。詳細は次のとおりです。

回数	【教育臨床Ⅰ】 テーマ：個の理解と支援	【教育臨床Ⅱ】 テーマ：個が生きる集団づくりと特別支援教育
1	自分自身を知る（1）：質問紙法	学校災害への対応（1）
2	自分自身を知る（2）：カラーージュ	学校災害への対応（2）
3	心の仕組みとナラティブ	学校災害への対応（3）
4	子どもの心理と発達	学校災害への対応（4）
5	傾聴・応答の理論と技法（1）	特別支援教育と発達障害の理解（1）
6	傾聴・応答の理論と技法（2）	特別支援教育と発達障害の理解（2）
7	コーチング	特別支援教育の実際：学校・学級での取り組み（1）
8	教育相談の実際（1）	特別支援教育の実際：学校・学級での取り組み（2）
9	教育相談の実際（2）	特別支援教育の実際：専門機関での取り組み
10	いじめの予防と解決（1）	特別支援教育と学級集団づくり
11	いじめの予防と解決（2）	ストレスマネジメント教育
12	教育相談の実際（3）	保護者会における構成的グループエンカウンターを活用
13	不登校の予防と再登校支援（1）	体験学習に基づく人間関係トレーニング
14	不登校の予防と再登校支援（2）	ソーシャルスキル
15	まとめ	まとめ
講義風景		
備考	前期開講。受講生は15名。ゲストティーチャー（客員教授）は県総合教育センター教育相談課課長。	後期開講。受講生は11名。ゲストティーチャー（客員教授）は県総合教育センター特別支援教育研修課課長。

今後の課題としては、演習におけるより効果的な内容選択や配置方法の追究、各回で取り上げたテーマが全体として有機的に結びついていくかどうかの問題、評価規準の設定などがあります。客員教授と協働しつつ、さらなる内容の充実を図っていきたく考えています。

## ■教育相談の活動報告

平成20年度一年間の教育相談利用状況は、相談件数22件・相談回数293回（附属学校園スクールカウンセラー業務を含む）でした。担当者が1名減りましたが、前年度に比して相談件数・相談回数は微減にとどまっています。内容面では、不登校・不登校傾向についての相談が首位を占めており、その他には親子関係、発達障害、場面緘黙、いじめ等についての相談がありました（相談内容の内訳はグラフを参照）。また、心理検査用具等を補充して設備面の向上を図りました。相談業務の質をより充実させるために、今後も地域の関係機関、とりわけ学校現場との連携を一段と強化していきたいと考えています。



## ■教育実践研究紀要第19巻の発刊報告

本センターの編集により、『鹿児島大学教育学部 教育実践研究紀要 第19巻』を平成21年12月7日付で発刊しました。今回は多くの方々にご投稿いただきました。紙面をかりて感謝いたします。なお、目次を以下に示します。関心のある方は、本センターまでご連絡ください（連絡先は最終ページ参照）。

### 論文

人権教育についての覚書 ―憲法学の立場から― ……横大道 聡・岩切 大地・大林 啓吾・手塚 崇聡  
実践的な力量形成を実現する教員研修モデルカリキュラムに関する研究

―「社会科授業実践力診断カルテ」の開発を通して― ……田口 紘子・溝口 和宏・田宮 弘宣

生涯学習としての合唱活動の一試案 ―白いうた青いうたフェスティバルの実践を通して― ……日吉 武

絵画教育における線描指導に関する一試案 ……桶田 洋明・米倉 秀太郎

体育授業における教師及びクラスメイトからの自律性支援の認知と動機づけの関係 ……藤田 勉

体育授業における目標志向性、動機づけ、楽しさの関係 ……藤田 勉

体育授業における達成目標の接近回避傾向と動機づけの関係 ……藤田 勉

運動部活動参加者の心理的欲求に影響するコーチ及びチームメイトの行動 ……藤田 勉・松永 郁男

ハンドボールに必要な間欠的運動能力に関するフィールドテストの検討

……………森口 哲史・市村 志朗・藤田 勉・永澤 健・前田 雅人

ものづくり学習における環境問題を扱う方法の検討と授業実践

―グループによる材料取りを通して― ……木村 彰孝・寺床 勝也・吉見 圭太郎・小林 大介

中学生対象の英語語彙の意味分析について ……濱崎 孔一廊

E S Pの進展 ―概観と展望― ……樋口 晶彦

たのしい「生活指導」の課題 ―いつも笑顔でにこにこ― ……内沢 達

対話を中心とした授業デザインおよび教師の対話指導方法の開発的研究

……………假屋園 昭彦・永田 孝哉・中村 太一・丸野 俊一

思考としての自己内対話の内容分析的研究 ―児童の自己内対話力育成における評価規準の開発―

……………永里 智広・假屋園 昭彦

鹿児島市における「放課後子どもプラン」の現状と課題 ……金子 満



相互支援型交流システムを用いた離島校と大学間の交流促進方策に関する研究(2)

.....園屋 高志・河原 尚武・植村 哲郎・関山 徹

自立と共生の教育社会学(その4) ―地域民主主義と学校の再生― .....神田 嘉延  
資料

「ユネスコ編・原 現吉訳(1950)、新しい理科教育

―戦災国における理科教育のための指針―学術資料刊行會」の今日的・意義 .....八田 明夫

「場の空気を読む子どもたち」に関する実証研究 .....金子 満  
報告

山形県の算数複式授業に対する取り組みの研究-2

―鶴岡市立五十川小学校の取り組み(全校算数)― .....安井 孜

第2回てらやまエコツアーの実践 ―森林環境教育の試行― .....寺床 勝也  
学生支援員の活用状況とその効果 ―A地区のアンケート調査の結果より―

.....甲斐 更紗・片岡 美華・雲井 未歎・内田 芳夫

総合講義「教職実践研究I」の実践 ―2年目の取組― .....下野 浩二

学習指導案作成を取り扱った授業についての考察 ―ビデオ視聴を活用した授業実践― .....田宮 弘宣  
学習指導案作成の手掛かりとなる模擬授業の追究

―総合講義「教職実践研究I」の実践を通して― .....隈元 浩二郎

実践的指導力を備えた教員の養成に関する研究(3)

―総合講義「教職実践研究II」の実践と今後の課題― .....大久保 直志

## ■研究員・研究協力員による研究の紹介

本制度は、教育実践に関するテーマについて本学部教員と共同研究を行うために設けられた制度です。前号での報告以降、1)～6)の研究がおこなわれています。ここでは特に、番号に「\*」のついた方々の研究を紹介します。

【凡例】 1行目：研究員氏名 + 研究協力員氏名(所属)、2行目：研究期間、3行目：研究テーマ

\*1) 八田明夫 + 木下紀正

平成21年4月1日～平成22年3月31日

環境と防災の科学と教育(5)

\*2) 三仲啓 + 金柿主税(熊本県/甲佐町立甲佐中学校教諭)

平成21年4月1日～平成22年3月31日

離島における遠隔映像観測システムと教育利用の研究(6)

3) 橋口知 + 大西純子(鹿屋市立市成中学校養護教諭)

平成21年4月1日～平成22年3月31日

中学生の意思決定力の育成に関する研究

\*4) 関山徹 + 久留一郎(鹿児島純心女子大学大学院教授) 餅原尚子(鹿児島純心女子大学准教授)

平成21年4月1日～平成22年3月31日

臨床心理学的な援助技法を備えた人材の養成について(4)

5) 和田七洋 + 今村洋一

平成21年5月20日～平成22年3月31日

デザイン教育におけるインタラクティブデザインの理論と実践の研究

6) 片岡美華 + 甲斐更紗

平成21年6月1日～平成22年3月31日

特別支援教育教員養成の在り方に関する研究

## ○環境と防災の科学と教育 (5)

報告者：木下紀正・八田明夫 (研究員：八田明夫、研究協力員：木下紀正)

研究目的：鹿児島地域の自然環境理解を学際的国際的視野のもとに進め、研究成果を教育に活かすため次の課題に取り組んできました。①トカラ列島周辺のユニークな自然環境と生活等についての出版。②火山ガス防災の基礎となる噴煙観測・ガス動態解析を進める。③衛星画像立体表示・衛星画像ネットワーク鹿児島・噴煙と火山ガスのウェブサイトの維持と充実。

これまでの経過と今後の課題： 前報以後の活動をかいつまんで報告します。

A. 口永良部島の南星丸調査 2009年5月11-14日、鹿大多島圏研究センターの2009年度プロジェクトとして水産学部練習船南星丸で17名の隊員による口永良部島・馬毛島沖合調査が行われました。教育学部関係では筆者2名と八田研究室の森井聖君 (大学院学生)・三原聡子さん (学生)、それに人文地理学の田島康弘名誉教授が参加しました。硫黄採掘が盛んな頃、口永良部島 (図1) の人口は千人を超えていましたが、現在は約150人が幾つかの集落で生活しています。中心はくびれの南側にある本村地区で、ここにフェリーターミナルや金岳小中学校があります。学校の一室にはエラブオオコウモリの標本や人文資料など貴重なものが展示され、島の博物館の役割を果たしています。八田研究室チームは黒潮に洗われる海岸や海中の有孔虫生息調査を行い、木下は可視・近赤外カメラによる島の地形と植生被覆の調査を行ってSiPSEによる3D衛星画像と比較検討しました [1]。



図1. 西の空から見た口永良部島。SiPSEによる近赤外3D画像で、活火山新岳と古岳の裸地部分は黒く表わされる。

B. トカラ列島と周辺の島々の総合的解説 2009年7月22日の皆既日食帯中央のトカラ列島は全国的に注目されましたが、ほとんど雲に閉ざされたままでした。この機会に屋久島と奄美大島の間に広がる島々の自然・民俗・歴史と、近くの口永良部島など南北に連なる小さな島々に焦点を当てた総合的解説書を出版しました [2]。この本では、屋久島・種子島と奄美・沖縄の島々や九州本土との関係、中国・朝鮮半島など、海と船で連なる世界の国々との関わりについて目を向けています。2009年は島津氏の奄美・琉球侵攻400年ですが、与論島に到る奄美群島を琉球から薩摩に割譲させたこの侵攻が現在の県境の起源と云えます。戦後には1949年12月25日までトカラ以南は米軍政下に置かれ、奄美群島はその1年後、沖縄は1972年5月に基地つき本土復帰という現代史があります。この本にはこの様な「海の道」の歴史地理ポイントも書き込まれています。トカラの島々や薩摩硫黄島・口永良部島など西日本火山帯に属する火山島について3D衛星画像などを用いて解説し、火山噴煙の性質や噴煙観測法、宇宙から見た火山噴煙、さらに火山島の産業・通信事情や災害の歴史と防災対策なども盛り込まれています。島巡りのお勧めと離島生活の参考書になればと思います。

C. 噴煙観測・火山ガス解析とウェブページの充実 英国から文科省国費研究生として2年間留学したT. Bouquet氏は2009年3月まで滞在し、理学部小林研究室に属して木下と噴煙や火山ガスの研究を行いました。2007年の硫黄島調査・島原火山都市国際会議、2008年の紫外線カメラによる火山ガス観測については既に報告しました。さらに、日本の四季の気象を熱心に理解して三宅島火山ガスを解析し論文にまとめました [3]。また、多島圏研究センター・関西大東西学術研の合同研究集会で、南西諸島火山と薩英交流について薩英戦争や外国船打払い令の因となったトカラ宝島事件も含めて報告し好評でした [4]。2009年2月には滞日研究の締めくくりの講演を同センターで行い [5]、3月にはフィリピンを訪れてマヨン火山観測所鹿大グループ観測機材の調整を行いました。

桜島に並ぶ激しさで噴火しているトカラ諏訪之瀬島のネットワークカメラ噴煙観測を2008年夏に移設再開し、2009年夏からウェブ公開しました [6]。トカラ中之島御岳は近年にも噴火し、薩摩硫黄島・口永良部島・諏訪之瀬島とともに鹿児島県火山災害対策の対象ですが、ここだけは気象庁の常時観測火山に含めていません。御岳の噴気活動について在住の福澄氏と報告しました [7]。2009年の桜島火山活動は活発で (本ニュース金柿・三仲報告)、4月9日の激しい噴火について教育学部で新聞・テレビの取材を受けました [8]。霧島新燃岳の噴煙が2008年末～2009年初めにかけて近赤外カメラで50km離れた鹿児島市から観測され、他の噴煙観測や火山ガス・黄砂エアロゾル研究と合わせて報告しました [9-12]。これらの予稿や発表の映像資料はpdf化し、噴煙・火山ガス・黄砂のサイト別・和英別にして相互リンクを貼ってウェブ公開しています。これらのサーバでは、データを搭載している外付けHDDの3回の故障やUPSの不具合というトラブルに

見舞われました。数日で復旧したのですが、電子情報社会の脆弱性を身に沁みて感じるこの頃です。科学情報ウェブサイトを長期安定的に維持充実し研究と教育に生かすには、継続的努力の必要性を痛感しています。

- [1] 口永良部火山島・可視・近赤外光でみる; SiPSE 3D衛星画像:  
[http://arist.edu.kagoshima-u.ac.jp/volc/volcnews/kuchierb\\_k/kuerb1.htm](http://arist.edu.kagoshima-u.ac.jp/volc/volcnews/kuchierb_k/kuerb1.htm)
- [2] 長嶋・福澄・木下・升屋, 日本一長い村トカラ～輝ける海道の島々～、梓書院、2009.
- [3] Bouquet, Kinoshita, Ground-Level Concentrations of Volcanic SO<sub>2</sub> at Miyakejima Island, Japan, South Pacific Studies 30, 2009, 1-18.
- [4] ブーケ・福澄・木下, The volcanic island chain of southwest Japan and British-Satsuma contacts, 多島研・関西大東西学術研合同研究集会, 2008.
- [5] Bouquet, The observation and analysis of SO<sub>2</sub> gas at Japanese volcanoes, 第93回多島研研究会, 2009.
- [6] 諏訪之瀬島御岳ネットワークカメラ観測再開! <http://arist.edu.kagoshima-u.ac.jp/volc/volcnews/swnewcam/sw08obs.htm>
- [7] 福澄・木下, トカラ列島中之島御岳の噴気活動, 火山学会2009年秋季大会, 2009.
- [8] 南日本新聞2009.4.15、降灰拡散の原因は「ウインドシア」 噴煙幅2倍以上か; 南日本放送テレビニュース2009.4.16、映像で確証 桜島「ドカ灰」; NHK鹿兒島テレビニュース2009.4.16、市街地に到達する火山灰とらえる、他2009.9.16,12.28.
- [9] 木下・永松・飯野・Bouquet, 大気エアロゾルと火山ガスの光学観測と大気拡散解析, 第11回CEReS環境リモートセンシングシンポジウム資料集, 千葉大学, 2009, 34-39.
- [10] 坂本・木下, 2001年桜島火山ガスを教材とした気象教育, 気象学会九州支部発表会要旨集, 2009, 5-6.
- [11] 木下・永松・土田・金柿・飯野, 噴煙・黄砂の映像観測と鹿兒島の大气環境, 気象学会九州支部発表会要旨集, 2009, 7-8.
- [12] 木下, 南九州における最近の火山噴火, 東大地震研共同利用研究集会「火山現象の数値計算研究」, 2009.

## ○離島における遠隔映像観測システムと教育利用の研究 (6)

報告者：金柿主税・三仲啓 (研究員：三仲啓、研究協力員：金柿主税)

### 1 はじめに

2009年、桜島の爆発的噴火が観測史上最多の年間548回を記録しました。2006年6月昭和火口活発化以降、PCとUSBカメラを用いた簡便な観測システムを垂水市役所、鹿兒島市錦江台、同市鴨池港近傍等に設置しています。記録映像の動画データベース公開[1][2]、映像をもとに降灰・火山ガスの防災・教材利用の検討をすすめています[3]。ここでは、2009年の桜島噴煙活動の代表的な事例を紹介します。

### 2 桜島昭和火口2009年噴煙活動と降灰・火山ガス移流

4月9日15時31分の爆発的噴火は、火口縁上4000mの高さに達しました(図1)。その後も噴火が続き、風下にあたる桜島南西部の赤水では、環境基準値(1時間値0.1ppm)を超える二酸化硫黄濃度が検出され(図2)、鹿兒島市には大量の降灰をもたらしました[4]。

なお、図2,4,6は環境省大気汚染物質広域監視システム速報値[5]より作成しています。



図1 4月9日15時44分桜島噴煙(鴨池港近傍より)

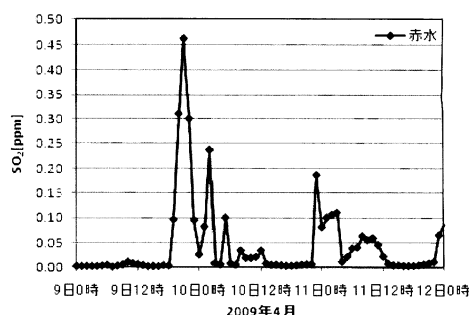


図2 4月9日～11日の赤水SO<sub>2</sub>

夏期、南方で台風や熱帯低気圧が移動し、桜島上空ではしばしば東よりの強風となりました。赤水で高い二酸化硫黄濃度(図4)、鹿児島市方面に降灰が見られました(図3) [6]。

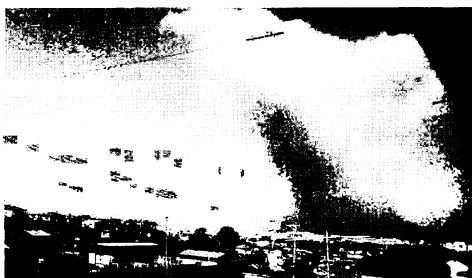


図3 9月4日15時12分桜島噴煙  
(錦江台より)

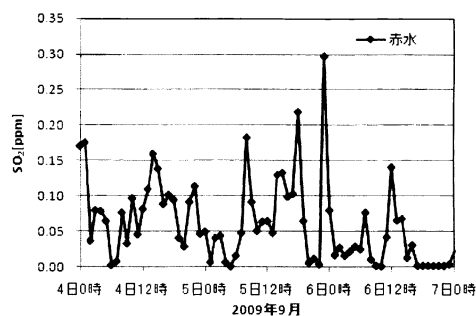


図4 9月4日～6日の赤水SO<sub>2</sub>

冬期、西高東低の気圧配置で強い北風となり桜島南部の有村では非常に高い二酸化硫黄濃度、環境基準値(1時間値 0.20mg/m<sup>3</sup>)を超える浮遊粒子状物質(SPM)が検出されました。



図5 12月16日8時5分桜島噴煙  
(垂水市役所より)

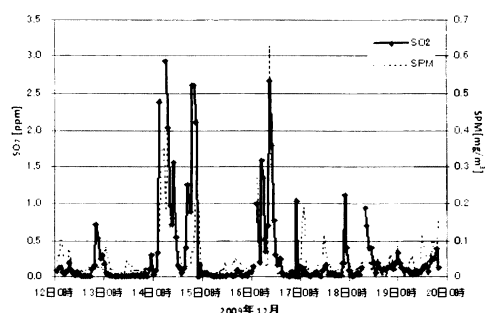


図6 12月12日～19日の有村SO<sub>2</sub>・SPM

### 3 おわりに

動画から、噴煙は強い風によって山麓地域に吹き下ろされ、はね上がるように移流していることがわかりました[7]。強風時は、風下の山麓地域に高い二酸化硫黄濃度が検出され、非常に危険といえます。多点噴煙観測の映像データベースは、火山活動や大気環境の指標、科学教育だけでなく降灰・火山ガス等の防災教育の貴重な資料となると思われます[8] [9]。謝辞：この報告は鹿児島大学/熊本大学噴煙研究グループの成果に基づいています。観測機器の設置について垂水市のご協力を厚く感謝申し上げます。

#### <参考文献・URL>

- [1] 桜島昭和火口付近2009 (鹿児島大学・熊本大学噴煙研究グループ)  
<http://es.educ.kumamoto-u.ac.jp/volc/sakushowa/sakurajima09/saku09.htm>
- [2] 金柿主税・飯野直子 (2009)：トカラ・九州の火山噴煙映像データベース、日本地学教育学会第63回全国大会講演要旨集、pp.28-29.
- [3] 飯野直子・金柿主税 (2009)：定点観測映像の防災・気象教育における利用、日本科学教育学会研究会研究報告 Vol. 24 No.2, pp.45-48.
- [4] 飯野直子・金柿主税 (2009)：桜島昭和火口噴火の噴煙拡散 -2009年4月9日鹿児島市の大気状況一、第50回大気環境学会年会講演要旨集、p.331.
- [5] 環境省大気汚染物質広域監視システム (そらまめ君) <http://soramame.taiki.go.jp/>
- [6] 飯野直子・金柿主税 (2010)：2009年春夏期の桜島噴煙と火山ガス、第10回大気環境学会九州支部研究発表会、印刷中.
- [7] 飯野直子他 (2009)：PIVによる噴煙自動観測映像を用いた流速算出の精度向上、2008年度日本気象学会九州支部講演要旨集、No.30, pp.9-10.
- [8] 飯野直子・金柿主税 (2009)：火山噴煙・ガスと周辺環境の教材化、熊本大学教育学部紀要、自然科学、第58号、pp.45-53.
- [9] 飯野直子・金柿主税 (2009)：2007年のNDVI画像を用いた三宅島火山ガスハザードマッピング、第9回大気環境学会九州支部研究発表会講演要旨集、pp.17-18.

## ○臨床心理学的な援助技法を備えた人材の養成について (4)

報告者：餅原尚子・関山徹 (研究員：関山徹、研究協力員：久留一郎・餅原尚子)

### 1 研究目的

「臨床心理学的な援助技法」は、学校教育・精神医療・福祉等の領域における対人援助サービスの土台を支える重要な一側面です。そこで本研究では、「臨床心理学的な援助技法」を備えた教員・カウンセラー・福祉職等を養成するために、どのような方法が効果的であるかについて、継続的に探求しています。今年度は、①臨床心理査定（教育相談や特別支援教育、緊急支援・犯罪被害者等における見立て）、②臨床心理面接（教育相談や心理療法等における、主に個人への関与）、③臨床心理的地域援助（学級集団や地域社会等のコミュニティへの関与）の3領域について取り上げて、関山（教育相談・教員養成；本センター教育臨床研究部門）と久留・餅原（カウンセラー養成・地域援助；鹿児島純心女子大学大学院心理臨床相談センター）の専門と所属先の特性を活かしながら連携して研究を進めました。

### 2 これまでの経過

#### (1) 臨床心理査定と臨床心理面接の領域

鹿児島純心女子大学大学院心理臨床相談センター主催の公開講座等を利用し、学校・病院・福祉などの領域で教師あるいはカウンセラーとして勤務している者の積極的参加の促進と、その前段階にある大学院生の基礎的内容の確実な定着化を試みています（平成22年3月開催予定）。特に、臨床心理学的な視点からの査定（見立て）について、発達段階に応じた研修を企画し、スーパーバイザーやコメンテーターにより、さまざまな立場からの指導・助言がもらえるような工夫をする予定です。また、大学院生に対する査定（テスト・テスト体験を通して自己分析を試みるなど）や、臨床心理士面接の陪席等を通して、質の向上、有効性の評価などを試みています。さらに「(社) かがしま犯罪被害者支援センター」との連携により、犯罪被害者への援助技法についての事例等を収集しつつ、考察を行いました。

#### (2) 臨床心理的地域援助の領域

現職教員（小学校・中学校・高等学校・養護学校）対象の研修会において、研修会講師等を担当し、地域への臨床心理的援助のありようを啓発しました。また、「(社) かがしま犯罪被害者支援センター」との連携により、臨床心理学的な援助技法（緊急支援等を含む）を学ぶことができました。さらに、チェコ・プラハや英国・ロンドンでの大学やクリニックで、被害者支援（PTSDなど）に関する情報交流等を平成22年3月末に実施し、文化差や、わが国独自の援助のありようについて考察する予定です。

### 3 今後の取り組みと課題

今後は、海外（チェコ、英国）の状況を踏まえ、これまでに得た知見を土台にして、グループワークや討議を通じた体験的な研修形式、倫理の問題、ライフステージに応じた内容などを組み入れたより効果的な養成のあり方を検討していくことが課題です。また、学校教育における緊急支援や犯罪の被害に巻き込まれた児童生徒への援助技法を備えた人材養成も視野に入れて取り組むための示唆を教育現場等へ提供できるようにしたいと思います。

## ■公開講座「授業に活かすコンピュータとインターネット」の開催報告

開催日：2009年8月3日～4日（2日間）

本センター教育実践研究部門・情報教育分野では、教育関係者を対象とした公開講座「授業に活かすコンピュータとインターネット」を毎年開催しています。

今年は過年度の「コンピュータと教育」から通算して24回目になりました。

現在学校では、教科の学習や総合的な学習の時間において、コンピュータやインターネットの利用が推進されつつあることは周知の通りです。また高等学校では、普通教科「情報」も既に実施されています。

このような状況に対応して行われた本講座では、県内各地の9名の先生方が、2日間にわたってコンピュータを操作しながら研修されました。

今年の講座は、コンピュータ・インターネットの効果的な活用方法、プレゼンテーション教材の作成法などを内容とし、受講者は各自のテーマでプレゼンテーション教材を作成しました。特に、途中で数名の受講者による作成教材の発表を行いました。これがお互いに大いに参考になったようです。

アンケートの中には、次のような感想がありました。

- (1) 自分が今やれているパワーポイントの使い方の他に、もっといろいろな手法を知りたいと思ってこの講座に参加したので、その希望が叶えられて、とてもよかったです。
- (2) プレゼンテーションはほとんどしたことがなかったけど、基礎的なところから丁寧に教えていただき、とてもありがたかったです。アニメーションやハイパーリンクを使うと、とても便利で見やすいプレゼンテーションになることを知りました。
- このような感想の他、概ね好意的な感想がほとんどでした。

## ■公開講座「教育臨床 実践セミナー」の開催報告

現在の教育現場では、社会の急激な変化を受けてさまざまな新しい問題が生じており、子どもたちの心理的な側面への配慮や支援が重要視されるようになってきました。このような社会的要請に応えるために、教育臨床研究部門では平成15年度より、教育関係者を対象とした研修講座(学校カウンセリング基礎セミナー)を企画・実施してきました。本年度は、これまでの内容をより実践的な観点を加味して一新し、講座名を「教育臨床実践セミナー」に改めました。以下に、それらの詳細を報告します。

### ○日程と内容(※1時限は90分間)

(1日目;平成21年8月5日)

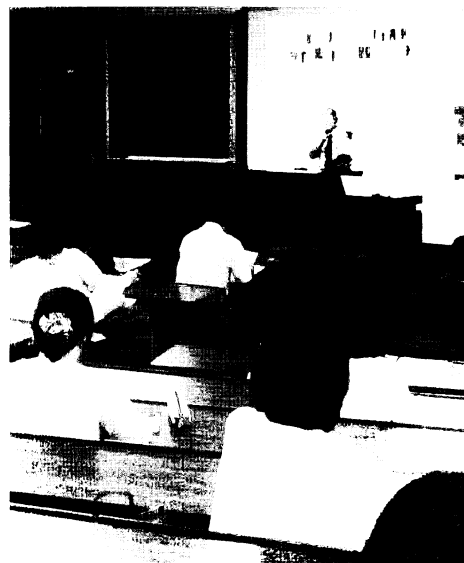
- ・1～2時限:発達と学級経営(教授 松田君彦;センター長)
- ・3～4時限:発達障害の理解とその支援  
(准教授 雲井未歎;障害児教育)

(2日目;8月6日)

- ・1～2時限:生徒指導におけるコーチング  
(准教授 有倉巳幸;本センター)
- ・3～4時限:不登校事例から学ぶ再登校支援  
(准教授 関山 徹;本センター)

○受講者:50名(規定時間以上を受講した方々には、修了証書を授与しました)

○後援:鹿児島県教育委員会・鹿児島市教育委員会



最後に、快く講座を引き受けてくださった講師の先生方、および講座にご後援いただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会に感謝いたします。

## ■公開講座「ネットいじめの理解と情報モラル教育の進め方 ～非対面式コミュニケーションの心理と情報モラル～」の開催報告

開催日:2009年11月28日～29日(2日間)

情報社会と言われる現代では、携帯電話やコンピュータ、インターネットの普及にはめざましいものがありますが、その一方で情報モラルに関わる種々の問題が発生しており、学校での情報モラル教育の必要性が叫ばれています。この講座はこのような状況に対応して、今年初めて本センター教育実践研究部門・情報教育分野と教育臨床研究部門との共同企画で実施したものです。

講師は、両部門の教員3名と、県教委指導主事1名の計4名が担当し、各講師が、非対面式コミュニケーションの心理、ネットいじめの理解と対応、情報モラル教育の内容と方法、校内での研修の進め方など、それぞれの立場から講義しました。さらに受講者(8名)との話し合いでは、ネット上の様々な問題についての学校の実情や、情報モラル教育の進め方に関して意見交換がなされました。

受講者のアンケートの一部を紹介します。



- (1) 今の社会・世の中の動きと、心理学的な理論や概念を結びつけることができありがたかった。ネットいじめという現象を多面的にとらえる面白さ、不思議さを具体的にとらえることができた。
- (2) 私自身生徒指導でケータイ問題を扱う中、「なぜそんなにはまるんだろう」という気持ちを持っていました。従って、いろいろな角度から情報社会を考えることができ、とても参考になりました。たくさんの先生方がこのような形で勉強（研修）してもらえれば、子どもたちを危険な目にあわせる機会が減るのではないかと思います。

この講座は初めて開催しましたが、このように概ね好評でしたので、来年度は開催時期、時間数等を考慮して多くの方が受講できるようにする計画です。

最後に講座にご後援いただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会に感謝いたします。

## ■センター運営委員会の報告

本センター運営委員会は、前回の報告（平成20年8月）以降、以下のように開催されました。各回で審議された内容は下記の通りです。

- 第33回 平成21年3月10日
  - 1) 研究員・研究協力員の申請について
- 第34回 平成21年5月12日
  - 1) 研究員・研究協力員の申請について
  - 2) 教育実践研究紀要の編集について
- 第35回 平成21年8月26日
  - 1) 平成20年度の決算について
  - 2) 平成21年度の予算について
  - 3) 教育実践研究紀要第19巻の編集について
- 第36回 平成21年12月8日
  - 1) 大学教員の校内研修派遣事業（仮称）について
- 第37回 平成22年2月9日
  - 1) 研究員・研究協力員の申請について

## ■国立大学教育実践研究関連センター協議会の報告

「国立大学教育実践研究関連センター協議会」とは、全国の教育実践総合センターや関連するセンターで構成されている協議会で、年に2回、総会等が行われています。

第74回、第75回の総会に本センターからも参加しましたので報告します。およそ以下のような内容について報告、審議、意見交換等がなされました。

第74回 平成21年2月20日（金）13:30 — 18:00（会場：東京学芸大学）

### 1 総会

#### (1) 挨拶

- 1) 園屋高志会長（鹿児島大学）
- 2) 来賓：文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長 堀清一郎氏
- 3) 主催校：東京学芸大学 鷲山恭彦学長

#### (2) 報告：

- 1) ICT活用教育支援協議会の報告
- 2) 各部門からの報告  
教育臨床部門、教育実践・教師教育部門、教育工学・情報教育部門
- 3) 新役員の委嘱

## 4) 平成20年度会計中間報告

## (3) 意見交換

センター協議会の次の新規の事業が説明され、意見交換がなされた。

- 1) 「モジュール型コア教材」の利用促進
- 2) センター協議会のホームページのリニューアル
- 3) 「年報」の内容、体裁、発行時期の見直し
- 4) SCSを利用して行っていた事業の別の方法による継続

## 2 部門会議

これまで別々に行っていた、「教育実践・教師教育部門」「教育工学・情報教育部門」は当面は合同で活動し、プロジェクト型の連携をしていくこととした。また、「教育臨床部門」では、各センターの活動報告、不登校研究会及び特別支援研究会の活動報告が行われた。

第75回 平成21年9月18日 (金) 9:30~18:00 (会場:筑波大学学生会館)

## 1 総会

## (1) 挨拶

- 1) 園屋高志会長 (鹿児島大学)
- 2) 主催校:筑波大学学術情報メディアセンター長 板野肯三 (筑波大学)

## (2) 報告

- 1) 平成20年度会計収支報告及び監査報告ほか

## 2 講演

演題:「教職実践演習」について

講師:文部科学省初等中等教育局教職員課 課長補佐 山田泰造氏

## 3 全体会

## (1) 教職実践演習について (発表・情報交換)

鹿児島大学・信州大学・北海道教育大学の発表ほか

## (2) センター協議会21年度事業についての中間報告

- 1) 「モジュール型コア教材」の利用促進
- 2) センター協議会のホームページのリニューアル
- 3) SCS代替事業 (SCSを利用して行っていた事業の別の方法による継続)
- 4) 「年報」の内容、体裁、発行時期等の見直し

## 4 部門会議

「教育臨床部門」、および「教育実践・教師教育」「教育工学・情報教育」合同部門に分かれて、話し合いが行われた。

## ■九州地区教育実践研究会の報告

前号で掲載した以降の日本教育大学協会九州地区教育実践研究会について報告します。この研究会は、九州地区8大学の教育実践総合センターの教員が集う会です。第27回は本センターが当番大学となり、以下のような内容の協議や研究発表を通じて意見や情報の交換がなされました。

<第27回> (当番大学は本センター)

○日程:平成22年1月22日

○協議

- 1) 教育実習中のメンタルヘルスマネジメントについて
- 2) センターの地域貢献活動について
- 3) 教員養成6年制についての学内の動きについて

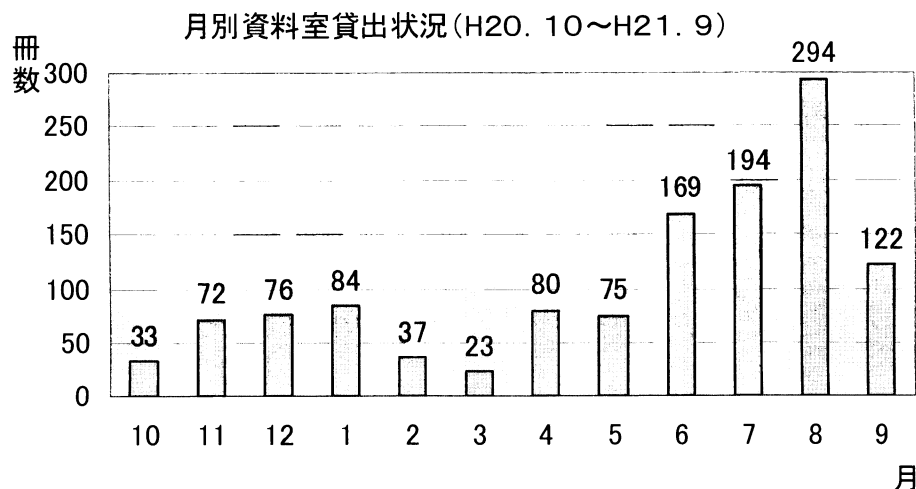
○発表・報告

- 1) 実践力を高める教員養成カリキュラムの開発 ―実践的教職科目群の取組―



## ■総合資料室の利用状況

本資料室は、学生や教職員はもとより、地域の一般の方々も利用が可能です。教育実習準備や教員採用試験対策をはじめ、さまざまな教育実践や研究活動にもどうぞ活用ください。また、所蔵している文献や図書は、本センターのホームページから検索可能です（学外からも検索可能）。前号以降の利用状況の詳細は、次項のグラフのとおりです。



## ■寄贈図書目録

平成20年10月から平成21年9月までの1年間に、本センター及び総合資料室に寄贈された文献・図書は、1081冊でした。本来ならばその全てを紹介すべきですが、紙面の都合上、初刊資料のみ掲載します。文献等をお送りいただいた皆様には、ここに御礼申し上げますとともに、今後ともご刊行の際には、ご惠贈くださいますようお願い申し上げます。

- ・「研究成果論文集」 1回 財団法人博報児童教育振興会
- ・「人間科学研究年報」 1巻 神奈川大学人間科学部
- ・「東郷重治遺稿集 教育に生きて」 近代文藝社東郷久子編
- ・「教育実践研究」 1号 大阪教育大学教職教育研究開発センター
- ・「二人のクローデル」 川口市立アートギャラリー記念事業実行委員会
- ・「教職センター紀要」 1巻 名城大学教職センター
- ・「一研究者の歩み」 いばらき印刷株式会社井出数彦著
- ・「CCT (教員養成カリキュラム開発研究センターニュースレター)」 第1号 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
- ・「これでいいのか!? 大学の授業 教科学検討の手がかりとして」 愛知教育大学教育創造センター
- ・「GCOE NEWSLETTER」 第1号 名古屋大学大学院文学研究科
- ・「食といのち」 鹿児島大学
- ・「大学のカリキュラム開発とインスティテューショナル・リサーチの有機的連携に関する研究」 鹿児島大学研究代表者 鳥居朋子
- ・「持続可能な社会のためのエネルギー環境教育」 国土社/社団法人科学技術と経済の会監修
- ・「教育学部紀要」 創刊号 椋山女学園大学教育学部
- ・「教員養成学の誕生 -弘前大学教育学部の挑戦-」 東信堂 遠藤孝夫・福島裕敏/編著
- ・「教員養成学研究」 創刊号 弘前大学教育学部教員養成学研究開発センター
- ・「現代的教育ニーズ取組支援プログラム 成果報告書」 1号 長崎大学教育学部
- ・「〈10年経験者研修モデルカリキュラム開発に関するシンポジウム〉 実施報告書」 鳴門教育大学
- ・「国際学力調査 (PISA) 結果にみる科学的リテラシーの比較研究」 第巻第1年次報告書号東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター

- ・「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 京都大学大学院教育学研究科
- ・「国際化と義務教育」全国海外教育事情研究会 清水一彦・山内芳文他/著
- ・「生物教育における生命尊重についての指導観と指導法に関する調査研究」国立教育政策研究所
- ・「〈1年制大学院が特別支援教育を変える〉報告書」愛媛大学教育学部
- ・「戦後初期における大学改革構想の研究」多賀出版株式会社/社島居朋子著
- ・「発達障害のある人の職業訓練ハンドブック」職業能力開発総合大学校能力開発研究センター
- ・「特別開発研究プロジェクト報告書」東京学芸大学教育実践研究推進機構
- ・「研究会シリーズ〈現代教育科学の最前線〉フロンティア・セミナー報告書」第1回 東北大学教育ネットワークセンター
- ・「HERSETEC」1巻1号 名古屋大学
- ・「〈高知大学ミドル・リーダーシップ基礎講座プログラムの開発〉研究成果報告書」高知大学教育学部附属教育実践総合センター
- ・「秋田大学教育文化学部第1回フォーラム報告書」学校における実践知の伝承と創造 - 21世紀における秋田の教育力- 秋田大学教育文化学部
- ・「新しい教員養成・採用にむけて-埼玉の経験-」埼玉大学教育学部
- ・「〈教職課程の課程認定後の事後評価のあり方に関する調査研究事業〉報告書」埼玉大学教育学部
- ・「ボランティアと教育に関する諸問題と教育系大学・学部での取り組みについて」日本教育大学協会学校外ボランティアの質的向上検討プロジェクト
- ・「教職大学院認証評価機関設立のための調査研究報告書」日本教育大学協会教職大学院認証評価機関設立特別委員会
- ・「ハンティング・エピステーメー-経済学への誘い-」近畿大学経済学部
- ・「アジア主要都市留学生サミット」大阪府立大学
- ・「堺・南大阪地域学術研究論集」1号 大阪府立大学
- ・「堺・南大阪地域活性化のための拠点としての心理臨床センター報告書」大阪府立大学
- ・「CLUB SANbe」1巻 独立行政法人国立青少年教育振興機構国立三瓶青少年交流の家
- ・「共同調査研究事業〈教員養成課程における体験学習のあり方〉」独立行政法人国立青少年教育振興機構国立三瓶青少年交流の家
- ・「博士学位論文 内容の要旨および審査の結果の要旨」第1号 女子美術大学
- ・「ちゃぶ台型ネットによる理科教育支援計画」山口大学教育学部
- ・「難治ウイルス病態制御研究センター5年間の歩み」鹿兒島大学大学院医歯学総合研究科
- ・「中等教育における持続可能な発展を題材とし科学的態度の育成を目指す教材の開発研究」国立教育政策研究所
- ・「PISA及び国内国語学力調査の比較を通じた新しい読み書き能力の範囲と内容の研究」横浜国立大学教育人間科学部
- ・「知識基盤社会を創る高度実践型教員養成を考える全国フォーラム in 東京」東京学芸大学
- ・「専門分野別評価システムの構築-学位の質保証からみた専門分野別評価のあるべき方向性について-」財団法人大学基準協会
- ・「男女平等教育シリーズ ~男女共同参画社会をめざして~」1巻 愛知教育大学出版会愛知教育大学出版会

鹿兒島大学教育学部 教育実践総合センターニュース 第8号

発行日：平成22年(2010年)3月25日

発行所：国立大学法人鹿兒島大学教育学部附属教育実践総合センター

〒890-0065 鹿兒島市郡元一丁目20-6 TEL 099-285-7736 FAX 099-285-7926

URL <http://www-jc.edu.kagoshima-u.ac.jp/>